

在宅医療・介護多職種連携会議

鹿児島市地域包括支援センター谷山北

作成担当者： 平田 大介

【計画】

開催日時	令和元年10月31日 19:00~20:40	開催場所	鹿児島市谷山サザンホール
参加者	居宅介護支援事業所：22人、訪問看護ステーション：9人、医療ソーシャルワーカー：8人、医師：3人、薬剤師：20人、その他：10人、地域包括支援センター職員：29人、その他		
	総数 101 人		
内容	テーマ	「看取り事例を通じて、本人の支えと多職種連携を考える」 講師：きいれ浜田クリニック 濱田 努 医師	
	目的	看取り事例をもとに、グループワークを通じて①本人が穏やかと思える状態とは何か？②本人の穏やかな状態を支えるために、私たちは何ができるのか？を協議することで、南部地域における多職種連携の推進を図る。	
	概要	今年度は、南部、中部、北部ともに、上記テーマで統一し開催する。今回は「看取り事例を通じて、本人の支えと多職種連携を考える」と題し、講師の濱田医師により実際のケースを紹介し、その事例をもとにグループワークを2回実施する。今回は看取り事例を取り扱うため、治療に必要な医療だけではなく、本人の穏やかな状態（環境面、精神面を含めて）を支えるための多職種連携を検討することとし、グループワークでは自分の職種が提供できることだけではなく、グループ内の他の職種に対して、「〇〇〇することはできませんか？」と声掛けをすることで、他の職種による看取り時における役割を確認することも狙いとした。また、今年度は鹿児島市医師会の「在宅医療・介護連携支援センター」にも、企画段階より参加していただいた	

【結果】

開催日時	令和元年10月31日 19:00~20:40	開催場所	鹿児島市谷山サザンホール
参加者	居宅介護支援事業所：22人、訪問看護ステーション：9人、医療ソーシャルワーカー：8人、医師：3人、薬剤師：20人、その他：10人、地域包括支援センター職員：29人、その他		
	総数 101 人		
内容	濱田医師による講義にて、「苦しみの構造」についての認識を共有した。苦しみとは、「自分はこうありたい。本来なら自分はこうあるべき。」という希望と、現実とのズレであることを認識し、目の前の対象者の苦しみを把握するためにはどうすればよいのか？また、その苦しみを把握したあとにその苦しみ（その人の希望と現実とのズレ）をどのように支えることができるか？について、専門職としてのかかわりはもちろん、一個人としてできることにも焦点をあて、濱田医師の実践事例を紹介していただきながら多職種連携（チームとしての強み）を考えるきっかけになったのではと考える。また、グループワークでは濱田医師の事例を通じて、グループの多職種チームで①本人の穏やかな状態とは何か？②本人の穏やかな状態を支えるために私たちができることは何か？を協議した。各グループ（それぞれのグループが多職種チームを編成）が専門職としてできることはもちろん、地域住民などの力も活用し、その人の穏やかな状態を支えるために、できることを可能性を含めて自由に話し合うことができたように考える。最後に、濱田医師より「何よりも大切なのは、目の前の対象者が自分の苦しみを打ち明けてもらえる人になること。」との話があった。これは、医療職、介護職に関係なく、支える側の基本的なスキルとして、対人援助技術の習得が必要であると解釈できる。本会が、今後の南部ブロックにおける看取り事例に活かされる大きなきっかけとなったのではと思われる。		
今後の課題等			